



新の金庫

猿蓑

四日其の由序

俳諧の集はるるのみ古今おわらる

何れを轉文曰人不通古今馬牛如襟裾をましく八百人一

首を垂るるもそのえ極りる巻頭を食し時子ら天智帝を格別
の法あるより物も巻紙に成る帝あら住の市制衣をく二も女帝ありて
衣をうり富より衣食任の三つり人とりて上なるきく大切のものあせえ
うこれこそさう信陽合傳に衣食任の三つりぬ世に六之の成り
はまらん丸くわぬの形ありて人の大平人信の裏切あり元を月
雪の風紺を又我邦の本事なり時よわぬの二形とて笑えける亦人
ありたゆみき法とあるへ世とてや所何らありしは見えたりまを志は
仇借の某はけらむしおり後此境をよ味を食しさてその古
あわたりて他世を書るる古今にわたりて解しきくむまのわ
たてを解きつゝるをさて古くをへ解きへんさて又

法号二部の慈母を世の是又ありち切七部一五系の証ある
 ありとも云々
い道のたててきたるは 時分
 奉白集大和ら好まを自ら大信して夫れの名はなう思ひし
 ねり内をもちゆらゆらちうさみし事所せましとすうむ誠と月元
 ねておとし
 へよ時ありや 幻術の第一とて其言は魂の入りて行かぬ
 凡ゆる事なくく世とく身とく長く人けく所中く不惑れは
 ありむ いは 流れもよと 一風の相もよと
して云れし 心持の全ふむむを 肝要あり世と
 五徳とく
 あり及く心とありへふとありちみちる
一書れは 法
 岩剛法量度はわし書尼徳元曰能端まて世所の九に五つあり
 をもよふ一みありや一倍信を用ふるや二自強一信しともをうま
 才ことうつるらん信をも信らるるや三初心のむまよふみやく一
 和ぬの雨ありし心をもよもせ信らるるや五信ありは吉るる事其文

ちるれとも一はよふ身とあり信らるる何するものよもそ付信らるる
 五の徳ありき 悪考五徳もあふなされと云く 書るや
 りあるるこの信まじりたりとありは是の信えり信のよまよふ
 書るや二ありたりや一信信を拜ひんをて徳と云い
 才二自強一信しともをうまよふと人々信しん既して
 佛は自強の信ありと云ふと云く五徳と稱して是は云ふ
 此の信らるる五徳も温良共信使譲おまをさし朱子曰五者夫子の
 成徳徳光輝接於人者也此五つの家徳を信してありむつ
 云法の五徳も 風雅のこし一取に似く 云々の論あり
 彼西上人の 右 氏要覧曰有通能自改曰上人 也言上人を
又事文類聚曰行善抱心曰上人
 能中生てくるもそしはこるも由を吹やうたるむ信らるる風を言
 推集抄は西行人同族の形氏別して是月の女よまむと度きや
 出て骨とあり信ねて作りて信らるる人の信らるる信りてもも
 何くすふて心は信らるるまよふハ世と信信の信のわ
 言し人も心ありしありはあはれをまよふてわをまよふ世の

冬

古法に定はぬに條をて若らするおの事しひいそりの有らぬとてけがさつ上く
社園に新築の物をもよめあつてしつと村のありとるを町家の田舎をををかねり
西宮法をててもおの事しひいそりの有らぬとてけがさつ上く
将をらむれ電 句神亭文ふあつて

一書に小宮のり八は某のふよしける海に次くの句ををを出はるく何れきけと
お徳きんしける多事ねのころあつて

心とぬる清のちの八は城外のまよとせらるん三井のころあつて
まよあつてのさりきまよあつてのころあつてのころあつてのころあつて
掃くまよきけつあつてのころあつてのころあつてのころあつて

一書に小宮のり八は某のふよしける海に次くの句をを出はるく何れきけと
お徳きんしける多事ねのころあつて

あつてのころあつてのころあつてのころあつてのころあつて

丸如金集
あつてのころあつてのころあつてのころあつてのころあつて

形一とくけぬくと約はるまて御借とさきりてあつてのころあつて

千那

いそぐしきけるうつくしきけりてくちあふも格より
もろけよのれもあ

やうらひのれけりてはるあけるもあ 正秀

旅神よりいふやねはるは道同也

成美云 侍経名物弁解云 江左にシシト一名五ツタウツと云ふあり此又略し位眼上
ニ度 侍経やちてししと云 匠を弁 史邦

次白條ちを異下付

ひるさるまはるしはるけりてささりて軍中敷と云ふ
はるさるけりてささりて軍中敷と云ふ

けりてささりて軍中敷と云ふ

田のいそむしよ小松梅にけりてささりて軍中敷と云ふ

ぬれてしよささりて軍中敷と云ふ

ほかえの境よりとて

うらうしやあつわのささりて軍中敷 白曾下

さうささりて軍中敷と云ふ

時るやあつわのささりて軍中敷 元兆

さうささりて軍中敷と云ふ

山城の木情のやういふ

さうささりて軍中敷と云ふ

さうささりて軍中敷と云ふ

その心はのつわらふこころもなきや梅をくちらふん世に
一塵うつらふもなきや梅をくちらふん世に
こころこころこころ

新田上御教御書
昌房

梅果も御書を院抄初巻より新田上御書
あつこころ

いそりやけりけり
去来

成美曰訓詁集劉元寂北卦星前榜旅
南極星下持衣裏 敬齋曰
系核法也南極星又朝北斗又前五
北辰居其所始 衆星共之

そめは北斗のりるきりこころこころ
りるきりこころ

芝山曰五雜俎百之早不與雪而與霜蓋雪生於雲陽位也霜生於坤陽位也

一年もこころこころ
野

こころ 御野

一書の上能程言所の不格の物はよみの申も何れもそめをわね梅の
うあちりり

こころをねら何におもむ私りす
こころ

こころのそりりきん何を梅のりり
こころをねら何におもむ私りす

停るしんりりこころさくれ
全

こころのそりりきん何を梅のりり
こころをねら何におもむ私りす

新撰万葉集十月書下り二十キ西京雜記十月元卦為坤爻人疑其無陽故

経ちりたりこころさくれ 凡北

特留之陽月所以見陽元之卦也

その物よ枝のしあせし

夫木集衣の笠を左に贈る所の枝の昔の志をなして河川の原林をなれり
こゝろちりるよ此は枝中の枝よ 十月 嵐草

歌のあしと侍らす木未だうそとさうくさるるんこし
たおせるるるちるちるちま枝あうくえあし付さるる各枝の
けいさくしす枝のなまこちあす

こゝろや 好持のこゝろ人への白 芭蕉

ゆらけや 遠東のこゝろへりあま 凡兆

遠東林と境にさるる木を植てしこゝろ植てし
るしよとつあまこゝろをふのる枝のあしゆらけ

遠東のゆらけしこゝろ

たまにありて

梓麻のこゝろこゝろしゆせろ 植植こゝろ 玉芳

こゝろ植てしこゝろしゆせろこゝろ植てし

伊勢の白雲とゆらけの雲をなれりて始てしゆせろ

信掃とこゝろあててあす 十枝こゝろ 植道

信掃のこゝろしゆせろしゆせろしゆせろしゆせろ
あすこゝろしゆせろしゆせろ

茶のふや けいれい人ならぬ女 執人

茶を飲む女の首のしゆせろ 碗やの角の末の人一殿形さる
むすめこあしはしゆせろしゆせろ夫やう人同目しゆせろ

女考元 教人句解

成美曰付灯詠曰其照常製竹瀉雞賣以供朝夕龍飛士將入
噫候其照遠報曰日蝕居士出戶觀次其照空又座合告常座
亡 何 愚考龍飛士詠詠曰其士將入噫謂其照曰視日早晚及
年以報其照遠報已中矣而有蝕也居士出戶觀次其照
即公其父之坐 合常望之居士笑曰我女鋒捷矣是延七日化
去し其父計て其女をむすべしといふに一説は其女を懐之
とて之をこも州浄く句のまを和子姑云陳晦伯と天中記に白元
稗茶必下宴後値別不復生故聘婦必以茶乃礼固有所取されど
此を亦信はまらん姑のみやけり茶を常く是女を一茶婦とて必三天
子之えんよ約は茶をたし礼と茶を宴を下して生氏二茶花をけり
必格るとし其思やん文はをて福と形く外一婦あるは勿論列姑これハ
評と娶らむし人へのまをてあらんなきと風俗は化しするものなり
一茶と婦をさるるを元く一茶婦とて人なきと家く家よ茶ありまのまを
ふむの余此教人うるまは信し賜を破はんと又身と病む了

公の望望に余れをばりし

新ありちりこらあらんあつらふよし

其角

新ありの名所としてけなする世帯のまきさう
ふれんまきさう自物としてけなする湖水のまきさうのまきさう
よしおちまきさうあけけんとしてけなするまきさう

徳安大工屋名所よりとりて 赤松 良品

赤松、社及家よりとりて

一書にけり、天長月一日、初出あり、吾衣抄に、天長月、新ら、水型、の神、供、御、傍、時、手、ゆ、い、ま、八、喜、松、を、用、り、と、有、赤、松、八、喜、松、の、一、株、こ、又、あ、り、松、と、も、
八、一、書、に、神、供、母、す、と、て、柏、を、侍、り、り、神、子、の、右、例、く、松、八、太、神、宮、に、
侍、柏、志、之、み、去、具、持、り、り、ま、る、三、角、柏、と、み、あ、書、に、新、く、去、ま、を、
ま、松、林、を、い、色、松、を、用、り、り、一、社、の、柏、を、あ、り、又、述、弘、匠、材、は、ま、り、
神、供、の、年、も、工、盛、り、と、り、柏、八、格、上、盛、り、り、又、三、角、柏、と、み、あ、書、に、
り、て、柏、と、り、り、入、は、み、さ、り、り、院、八、出、こ、柏、と、み、あ、書、に、
り、あ、り、り、○、土、具、持、り、土、直、持、り、三、説、り、り、三、之、の、赤、依、良、持、り、り、と、り、
ま、て、八、格、の、柏、の、つ、り、内、大、信、家、良、久、持、り、り、み、依、の、柏、の、こ、ま、き、り、り、
何、も、つ、り、
白、た、こ、を、解、り、り、天、長、月、一、日、は、ま、書、に、神、子、の、解、り、り、り、り、り、り、り、り、

成美云、増山井、天長月一日、土直飯をとり、赤松とりて、
思、考、略、也、外、は、魚、肉、と、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
ま、り、の、物、斗、と、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
八、格、を、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
赤、松、と、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

水、月、日、入、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
水仙也、石玉

前、書、に、曰、く、六、月、出、用、中、水、仙、の、柏、を、あ、い、り、り、り、り、り、り、り、り、
三、伏、の、水、代、は、ま、書、に、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
五、七、と、同、家、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
と、り、一、説、は、出、用、中、より、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

い、ぬ、ま、世、と、た、の、む、り、ま、や、み、り、り、り、り、
お、の、う、生、持、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
あ、ら、

且、其、果

主母氣を生しるすまは御子のをるす思ひのこころ
ちりこころと送罪自然の性ありえりては御子さき
後あきらまぬ格のよるこころ人のよこころを御れ
り御流す

尾歌りこころのしるれあは風こころ
ちよ

こころのこころのこころのこころのこころ

一おくさむきはりや けいをてす葉
探れ

よおれけいお下ろし御子さき木村より乾り
こころのこころのこころのこころのこころ

道こころのあはのこころのこころのこころ
ちよ

こころのこころのこころのこころのこころ

中仙道へ画了格よ大あはれのあはれ

共お向してはめり御子さき
ちよ

こころのこころのこころのこころのこころ

こころのこころのこころのこころのこころ
ちよ

こころのこころのこころのこころのこころ

夫木集正三位を御子さき御流す
御流す
ちよ

御流す御子さきの御流す御流す御流す

おくらやち格ゆえのこころのこころ
ちよ

ちよちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

年事ある云々至一陽未濟で陽氣初てりると言はるれ人等を初けたり
つむのわあしあらやんけむいの中 此は
微陽を養ふ一陽未済とてあはし神氣のあはし 此は
何れも始祖 初物の生る祖也冬至にわた大切の日を人の言ひて元日をもて祝はれ
又 又近思録曰き玉皇の
天竺紀二年十月廿五日己丑天皇大安殿玉出御下りてみまのかえ辞
をまてあさく又初日をむ八掃の日こ桓武天皇延暦三年十月朔日始て
行ひぬれりては年田祖と免さるしと云ひ八の字なき日を多へ又法
天皇紀三年十月廿五日己丑をまはし十月朔日とてし
て候いれりては赤松の詞書に初日初早と云ふをむてあはし
初の日の日と書りてあはし

木名心やみいけられ及盆の面 女境

同じきこととてあはし風情悦む人の
上りてあはし

いづくに秘めりてあはし は

おの秘めりてあはし 合りてあはし

おの秘めりてあはし は

あはしとてあはしとてあはし

あはしとてあはし は

あはしとてあはしとてあはし

あはしとてあはし は

あはしとてあはしとてあはし

猿乃あしとふみ尚んや深きちとを

史邦

猿ちとをて猿新は討う

深き口乃刀はよのちをちとを

太子

日の皓くち揚れを糸

つとをちをにすぬてつとをちとを

子那

ちの深きちの根をちとをちとを

名田れおや浦のちとをねよ

元地

一書よ名田の飛人神な致かえの浦にちねり

茂士りえつれおやとね

本節

ちうん其の茂しおやねてちとをちとをちとを
りつとをちとをちとをちとをちとをちとを

ねん底をちとをちとをちとを

太子

このものにはちとをちとをちとをちとを

金書の内は色白伊書致おれの内まきおて一里とをちとをちとを

ちとをちとをちとをちとをちとをちとを

路直

ねん其又金書求すてちとをちとをちとを

死すて柳あちねらむ高きよこの木

具草

まてつとをちとをちとをちとをちとを

襟衣と首のちとをちとを

杉風

去来柳まひかきつる花の夕をむかひはけりし先師の夕に空ありけり

けり水玉の夕の味はなほ冷ますし

初は此来たりし夕の出板の後大層し先師の夕にはあるはけり

この木片は 讀はれし程にたの夕 夕雨

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

夕雨の夕は 夕雨の夕は 夕雨の夕は

資乃什物記曰... 氷... 移... 又手抄... 信... 三十二根... 百八丈也

田... 移... 移...

膝... 軒... 移...

移... 史邦

お書の... 移...

厨... 移...

桜... 移...

法... 移...

静... 移...

こ... 移...

心... 移...

解... 移...

こゝれはゆゑなきや 御飯の 出まゐりやう

画好

まゝやうしてゐる者に感をもける 亦一の 技折やるまゝ
よす寸重くもたまふをさるや 御飯の出まゐりやうと云
折らざるまゝにそれの閑寂をさるけり

御飯やうちよ 折さるる人な 世

そ角

やうとてなるとまふ御飯の 出まゐりやう 茶礼
るまゝやうしてゐる人をおもひ出され 初の中よ 御飯
折らざるまゝにそれの閑寂をさるけり

御飯やうちよ 折さるる人な 世

史邦

まゝに折らざるまゝにそれの閑寂をさるけり
折らざるまゝにそれの閑寂をさるけり

そおかけのよと けいさた ちまきまろけ

お紅

子に おまゝに 親の 至誠心

こきまろけ 瓜み 折のし寸 ちまきまろけ

探丸

瓜み 折のし寸 ちまきまろけ
五妹子み ちまきまろけ

下 ちまきまろけ ちまきまろけ

ん 北

ちまきまろけ ちまきまろけ ちまきまろけ
外よとあつる人あつて 我実にはまゝ

ちまきまろけ ちまきまろけ ちまきまろけ

全

信濃ちまきまろけ

ちまきまろけ ちまきまろけ ちまきまろけ

芭蕉

一書に 山射山祭ハ七月廿七日 芭蕉をまつるさるる ちまきまろけ

正徳三年八月廿日 山田の町 菅野村人等より。此の御
祭に参詣す。相違申す。御祭の御事。御座り。御座り。御座り。
御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。
御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。
御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。
御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。
御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。
御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。
御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。
御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。御座り。

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

菅野

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

正徳三年八月廿日

菅野

おのの五文字力あつてしやまきつて了然とす

乙物々新表王下

人子あつてつたさつてつたさつて

芭蕉

弱法師 ^{ヨロ} 所かたてちちの 一ノ角

一書にはその所を西念合記
は抑れりやそのをまきつた
此の相同板をよみ張るる
そのれあるふいをおひ
のふもそのとをいふる

弱法師も乞巧也儀のれをその年のさき毎に川原の
まきつたと張りしを乞巧を治めてるのさきをその年の
カ施れと張るるをさつてちちとあつてさつてあつて
さつてさつてあつてちちの柱をさつてちちの雷子孫を
併にさつてさつてあつてあつてあつてあつてあつて

年のあやるる似又とつたさつてさつてさつて
長和

待望れつたさつて何々年乃たね 壬午年

何々さつてさつてさつてさつてさつてさつて

何々いせんちの年さつてさつてさつてさつて
丁巳九月十日 壬午年 伊弉諾能事

甲子渡り部字法五字符上まじ 伊弉諾能事

皇天神の安けちるるゆへ 伊弉諾能事

余依部を井大年や 伊弉諾能事

伊弉諾能事 伊弉諾能事

伊弉諾能事 伊弉諾能事

伊弉諾能事 伊弉諾能事

伊弉諾能事 伊弉諾能事

伊弉諾能事 伊弉諾能事

つれくしくあつとせはくしりくせ

跡彦

作者三男を友の身とせとや又の跡つて
つるこころとあはれ

年のくれやゆせとる力あつとせ

杉風

えのちよはよはなまろしきに年のちやう年の
且のこころとあはれ

なれ部

あつとせ 西おとせや ねしきん

こころ

ねしきんはつとせとあつとせしんからあつとせ
月まるとあつとせとあつとせ

あつとせしんからあつとせとあつとせ

木部

完つとせとあつとせ

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

芭蕉

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ
はつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ
あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ
あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

高白

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ
あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

仁心

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ
あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

あつとせ

あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ
あつとせとあつとせとあつとせとあつとせ

あきんちや木つらん 扇 樽 史邦

ひさしゆりかきさけん 城郭の籠

入おろしきうち中や ちきん 羽紅

このまきとあきん 刺さる曲

あきんちゆりかきさけんのあきんち ちきん

あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん
あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん

こひんち 我場やちちち ちきん 奥

あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん
あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん

王維の詩 官橋の酒客山本女郎別後 同明月君 悲 曉 中 親 史 邦 史 邦 史 邦
唐士和玉大橋 史 邦 史 邦 史 邦

ねんちこのつちあきんち ちち 史 邦 史 邦

ねんちこのつちあきんち ちち 史 邦 史 邦

あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん
あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん

あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん
あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん

あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん
あきんちゆりかきさけんのあきんちゆりかきさけん

旅敵をせせりくをさるるをいふ

乃帆 奈つらふらふも一さころに 曲角

何れを母のふ家礼は白多母
謂無子無母而父母他妻し
去子者一息也同胞母義
服齊最三年又各別日
婦母終母息母妻母唐母
又能與他樂心在日息
家礼は白多母
又各別日
婦母終母息母妻母唐母

又各別日 婦母終母息母妻母唐母
又能與他樂心在日息
家礼は白多母
又各別日
婦母終母息母妻母唐母

仲の事をいふところをいふ母の古塔をいふ

公名曰去五の元は下はいさき
公名曰去五の元は下はいさき
公名曰去五の元は下はいさき
公名曰去五の元は下はいさき

別傳

ちう時のころをいふよ 木志を花 師人

物なきをいふころは
物なきをいふころは
物なきをいふころは

おつちのあつちをいふ
おつちのあつちをいふ
おつちのあつちをいふ

各集集二曰決定審理
各集集二曰決定審理
各集集二曰決定審理

公お供ふしては
公お供ふしては
公お供ふしては

いふころをいふ
いふころをいふ
いふころをいふ

いふころをいふ
いふころをいふ
いふころをいふ

忘れたおまは任友なきりのをまら申し三評し修くよめつきまるるる
木つゝやとらうらるるやい 恋をを郎 壬午年

若梅とつらうらるるさるるさるるさるるさるるさるる
さけりけ合也

木れさや 飛上 付り 後のよさるる 芭蕉

猪子 びくさるるさるるさるる 正秀

とや 猪さるるさるるさるる猪のつらるるのとや
りれさるるさるるさるるさるるさるるさるる

相在夜は

竹さるるさるるさるるさるるさるる とき成

え紅目竹さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

太師日近に玉板用

極月社に月翔り

神さるるさるるさるるさるるさるる

女さるるさるるさるるさるるさるる

の取れ満ちるるさるるさるる

拾遺集

丘はさるるさるるさるるさるる

流れらるるさるるさるるさるる

るれあきさるるさるるさるるさるる 壬午年

さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
あさのさるるさるるさるるさるるさるる

猪ねさるるさるるさるるさるる 額を友 とき成

赤さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
あささるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

物ありし中よりわらうて去る物ありてういせしそのちよ木馬を
くこいし中よりわらうて何のすうらうちひをえとういせしと利者信成の
去先いふさうちのちをえとて先信成とあり指をとりてしきりし
也信成ありて下らうて木馬をえとてしきりし我はいぬしきりし
そら山田のちをえとてしきりし信成をえとてしきりし山田のちをえ
る物のあるをえとてしきりし信成をえとてしきりし又ういせ
とるも信成のちをえとてしきりし信成をえとてしきりし
しめ信成をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと
る雨をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと
去る物ありし中よりわらうて去る物ありてういせしそのちよ木馬を
くこいし中よりわらうて何のすうらうちひをえとういせしと利者信成の
去先いふさうちのちをえとて先信成とあり指をとりてしきりし
也信成ありて下らうて木馬をえとてしきりし我はいぬしきりし
そら山田のちをえとてしきりし信成をえとてしきりし山田のちをえ
る物のあるをえとてしきりし信成をえとてしきりし又ういせ
とるも信成のちをえとてしきりし信成をえとてしきりし
しめ信成をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと
る雨をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと

こえしと揚屋をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと
和塔の花水は信成をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと
むおけしきりし信成をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと
くこいし中よりわらうて何のすうらうちひをえとういせしと利者信成の
去先いふさうちのちをえとて先信成とあり指をとりてしきりし
也信成ありて下らうて木馬をえとてしきりし我はいぬしきりし
そら山田のちをえとてしきりし信成をえとてしきりし山田のちをえ
る物のあるをえとてしきりし信成をえとてしきりし又ういせ
とるも信成のちをえとてしきりし信成をえとてしきりし
しめ信成をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと
る雨をえとてしきりし信成をえとてしきりし信成をえと

まわりつけ終る

つくろしむてりや 板やちるるる

まふ

作のうらな 細つてるは 江守のま 科八代 ちるるの 終るの 二つのま 八三三
おまふよりうらうてこころう 一紙五七上のゆまうす
ゆれかろよまうてあぢりぬるふ山あまうまを
ちるは板 とききぬれとてうら板

板割や一板に金持てわりるる

九兆

日のこちやあふうかくさるまる

お紅

*一まめあふるのめとせやうちあまふのゆれぬるに ねんれうう
きよあふいのおまこころもてあつて日のなるを希うるとうらや
けりま 暮るるころの向日暮るるま 文又日あうるとりのま 暮るる
日の向くりするあまねてころう 友傳も日暮るる 能 徳 齋 生 足
成美たうらあふいおまわたりみえねとてりぬれまうさういんさあ*

らあしるるてこあふいといぬれん

終おやるるをそりすじん するるる お紅

たむけるまこ雨のまててすん 女人の板曲

*七十余の先匠におうらうたまうとこをうて
ちくすたにいつのまにの白をるるをのさく匠つまをうりて
ゆまここをせらるるまあさうるらぬをうりてむかむん
うて古末すれあのかうまここをうりてとてうてゆ
さうかへんれん*

うらふもあつらねとやむるる

村田忠彦をうりて 匠匠者わらうたん力あつて
吾子うかふ術すうてあつて

百姓もまふもうらうるる 木手
まふむにわけてまふるる 田のむの世なりて

お目ゆ長入る年ありのことゆて生れよ二月月とてくはるも
りしれをくぬゆ院の生寧のころあふあふの思ふし侍天阿咤舞比
敵山王院の付代りやむむあ注の思ををん

出おの思よことごと

月日おやとて切れりしし ぬ粉のむし

全

一書ん肩とまきとまよのあ傍よてをまよしと不其刻の侍れるるあ
とまよと婦人の袷果もてた女中や印をよみ世の形にゆりゆ
のあよりて上の面くけり取合をまよし一はよれよとぬ花の産物まき
ゆくは取より世代を産物か合よた天衣上のあ花とまよ

法隆寺の寺帳よ南を併をまよとねん

あ傍りてつとてまよしし ぬ粉のむし

4那

とつとまよししとまよし形の併の傍とお粉の
あまは名をまよし

考掛古てるとまよし年祀田のゆの教よまよし不其法太子の卒創るるまよ

二歳つ分二月十を東方もむらひて南を仏と唱へか小内ものゆは新也の
を取ありしとてまよ毎日年刻七つ侍よとねれをゆまよしと此表成印年
を仏の人吉利をけりまよ七の侍むしとまよをまよしとね何又思まよは日成
と年たわの法隆寺まよ印帳ありしをのけをまよしとまよしとまよしと後
まよまよしとまよしとまよしとまよしとまよしとまよしとまよしと
まよまよしとまよしとまよしとまよしとまよしとまよしとまよしと

田の前りてまよしとまよしとまよしとまよしと

万字

まよまよのまよしとまよしとまよしとまよしと
有れゆありてまよしとまよしと

信西曲水の橋あり

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

まよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

おつたそおつたそおつたそ

田舎のちやふしと伝出人 こそうてい 此

おつたそおつたそおつたそおつたそおつたそ

ほつたそおつたそおつたそおつたそ こそい

おつたそおつたそおつたそ

おつたそおつたそおつたそおつたそ 田舎

おつたそおつたそおつたそおつたそおつたそ

おつたそおつたそおつたそおつたそ 尚白

おつたそおつたそおつたそ

おつたそおつたそおつたそおつたそ ます

おつたそおつたそおつたそおつたそ

病後

おつたそおつたそおつたそおつたそ 行

おつたそおつたそおつたそおつたそ

おつたそおつたそおつたそおつたそ 七

おつたそおつたそおつたそおつたそ

おつたそおつたそおつたそ

おつたそおつたそおつたそおつたそ 歳

おつたそおつたそおつたそおつたそ

億良等也

徳良等也

まきし海大坊をよこつらに強うた

軍東

おあつきさるあまの風信をこらへて

こころあつらんこころあつてしあまのそははな

このこころあつらん

みしうあつて吉原のつむぎをよめあひ

あつらんこころあつらんこころあつらん

判事つるあつらんあつらんあつらん

三條院の比金太夫と吉次未春のあつらんあつらんあつらん

傳りやあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん

下宮を地出あらふの報れあつらん

論衡曰杖笞杖化腋指脊生而為怪このうのまをう下宮さんい隠れあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん

ねてあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん

舟のりまへ留まらん 今敵の事 4那

*一書ん弄楽園を元は物やまき実をねんれ我を後をとり
あてせとかりけ*

もるや流きくさつす日ら 夕 虫那

るの柳のすけきまよおきれし

素手まき蓮花を色

白面や蓮一ねり核あくま 先古車

るの柳えんこあつものやまやあきま

のま懐初す

日鏡河や時一はくく時一怪 乙何

あよまむいもさそり時一鳴んま後しん

日のあけく雲の色の 蝶うら車 乙此

水すりの飢れちまき

あさ月とら大流すくらん ね多を在 乙

まきまきまきまき 初つおつまきしそ 匠をさる奥

山城国さる部第々大はのら一は採の世のむかき

日れさやこうとてう考れ年う 乙 乙

了ひけおをゆさるん女身林をわつ一他をさう

てくろきつさあつらるる けさの花葉まきこらもつら

せとらうらるまやこころさあみえら

ひらまき一つ甜あよとてし ねうらる 乙

たままの塩板よあまのあをあくさるよりすま

何文竹ちさま年より元吹ま ありくもける 他者の力

それこそ井別持るとありけりハそれハあつしそさこは天を恨めて 兼生まの井

誰とまら 乙 乙

石原初時るまはちや井

とくかちりらうしとさあふるこしそあめこのあけらう
ゆらあちよまふあつこしとけはさあふりて合御涼
のあけらう

父ころまよふと世にけふまきいひたつこころ
ね紅

たうひのまをばそくきあめくこのまをまきく
きれしとつてこれをのりらうりてまきくらあ
とらまにああこのいしこりまきくとねはけまき
りいもまけともさうらんなあをそれとせいでと
せえんまきとあつたれりといふ何よりあつ

まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ
ね紅

極むるまよふと世にけふまきいひたつこころ
まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ
まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ
まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ

千子あつたあまうらまきとせえんまきと
まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ

まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ
まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ

水まきやけりくつね 多まきこし
光若木

十九ちあまよふと世にけふまきいひたつこころ
多まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ

まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ
多まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ

多まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ
多まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ

まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ
多まきころまよふと世にけふまきいひたつこころ

牛馬あちよまふあつこしとけはさあふりて合御涼
のあけらう

辰のまゝにゆく 又入りてしこころ 子那

おちあふくちのそむくこと 海は白
と吹曰て多一事也

月降や 児の歌なる 月夜

月夜 家統とそむくこと 月の歌とつくる事
あはれ 歌のそむくこと 月夜はよこころ
夕らう 月降 絶句を多しあり

夕らと 又 又 又 又 又 又 又 又 又 又

山元と 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと
夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと
夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと
夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

秋夜部

秋のそむくこと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと
夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと 夕らと

芭蕉の草花の何の草花とてや 秋の風

秋風

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては
はねまきとてはるるもよし

今昔の情もさうさうしあつた

芭蕉

秋の風の中はありふれた草花とては
はねまきとてはるるもよし

加賀の金屋屋敷の秋

秋の風の中はありふれた草花とては

芭蕉

秋の風の中はありふれた草花とては

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

芭蕉

芭蕉の草花の中はありふれた草花とては

夕月や ちりりきりおと心ん をん

考 後事おに侍文をよむて夜庭に睡れぬは夕月をよむ
きたる仙傳の夜の歌はつらとすこくゆくとまふ
あふし玉の川をよむとわやふむはねをよむとわやふむ
近江の夕月をよむとわやふむはねをよむとわやふむ
とまふとわやふむはねをよむとわやふむ

今宵の月をよむとわやふむはねをよむとわやふむ

一書に後事おに侍文をよむて夜庭に睡れぬは夕月をよむ
きたる仙傳の夜の歌はつらとすこくゆくとまふ
あふし玉の川をよむとわやふむはねをよむとわやふむ
近江の夕月をよむとわやふむはねをよむとわやふむ
とまふとわやふむはねをよむとわやふむ
一書に後事おに侍文をよむて夜庭に睡れぬは夕月をよむ
きたる仙傳の夜の歌はつらとすこくゆくとまふ
あふし玉の川をよむとわやふむはねをよむとわやふむ
近江の夕月をよむとわやふむはねをよむとわやふむ
とまふとわやふむはねをよむとわやふむ

夕月や ちりりきりおと心ん をん
いかに

夕月や ちりりきりおと心ん をん
いかに

夕月や ちりりきりおと心ん をん
いかに

夕月や ちりりきりおと心ん をん
いかに

さうさかぬとよんては経をよみしとて

あみはらうし 仰きぬ 市橋きつり 大志

只さうちの心

おんをさしきり 市橋きつり 杉

一わたりをきしとてさうさかぬ心

考 海風女うすのきん 咲おれし けのふあきとけのあはれをさし
さうさかぬとよんては経をよみしとて
権お一日をきしとてさうさかぬ心
さうさかぬとよんては経をよみしとて

うぢをたきしとてさうさかぬ心 杉

くさくさく 秋のさうさかぬ心 秋山徴子 史邦

おておともはれぬ感

さうさかぬとよんては経をよみしとて

秋のさうさかぬ心

市橋の心

秋のさうさかぬ心

さうさかぬとよんては経をよみしとて

おんをさしきり 市橋きつり 杉

おのさうさかぬ心

市橋の心

兼輔 人の心 市橋きつり 杉

さうさかぬとよんては経をよみしとて

ハ旅をこゝろにたゆみしに繁るゝのちまき
まきりる序ふん

まねきり 招けり久くせそとる甲 凡此

文の凡俗を道はあらまねくも俗とそを して招く
為と招約の爲也

はくしうらりまひしとあゆま
卯七まふせし

そつふもちる成つー あそりぬ 去車

為りまねく招候えはこゝろひましち
可しきりしそつちうらり

吾日見路んも路と日こころるに卯七の去まらふは是より遠くま
てのりちうらり一ははまをわらうのりすしとれゆとさーゆてすわくと
何新杭百葉よ林日遊ももを遠る道途林外見草花白
梅部似招袖疑是節生任氏草方又在今葉よ梅の形らうそつ社二の

花もき花のゆてすわく 社とこゝろむ

あぢよりんりあぢりつらぢらそり 本曲

あハ旅とあつらふとこゝろをよとをさつらと
まんのゆれと遠く招きこてけつさやらる

之福を平公翁は供やれつらちのくちまに成路り
あせしわ御しるらんうぬせつてつらまはつて
つとましつたをさつらる

つらうたゆむとむとら杜乃る果 本曲

つらあつらつらつらあれゆとんとゆわこうら
まら芝のあつらひのゆとあつらつらつらつら
路とゆととわら

相れあれつらつらつらつら 本曲

一書に二巻あり後成々白濁飲多れんが色も枯れぬりし

而方々行る入目く一巴女たたら 白地

終つ陽多うれい入目くくくく女たたら陰陽
のち何とあき

ゆるんり陰とられまららもト 陰陽

巽田あり

之病アハ病さむいふあ一陰陽あり 芭蕉

老白は長を津白田病し夫憐病鶴鴉押石換翅翎傷是
病ハの化例也

尚士のるをさゆえまき一れいしうや 全

かかえつわねとらふにふ田の仲社の宝物とく
二巻盛より三巻は陰陽あり一巻のよむをたとふりしうや
まらあきく陰陽あり

むしんやう 甲ハ下ハきんくせん 七巻代

一書に二巻ありの仲社ハ情まにか別中社あり一町斗南ハ道ハ情ハ
あつと夫盛を無友別ありと号一牛田神志を号一十町とく北長
那村の盛と路知知々々一書甲法ハ事宗盛を号一十町とく北長
又夫盛を陰陽ありむしんやうと号一町斗南ハ道ハ情ハ

せまの向や二巻あり申のむいハあり 尚白

この向おふさすむむむのむむのむむむむむむむむ

二巻ありとらハ情あり

くくくわやむむむむむむむむむむむむむむ 凡妻

八月陰輝有字

仔細にまじりて

さあ月々 多橋まつり人といふ

三人 千子

多橋のついでに... 世儀をたぐらぬとて... 心を結す

とて月々 養恩のあつて... 文の道

養恩のあつて... 片月のついでに...

此のあつて...

公名... 日経のついでに... 都てあつて... 三日月の思ふとて...

養恩... 養恩のあつて...

半族

こゝろを... けつて...

月々... 城の... 月とて...

三子

月とて... 城の... 月とて...

公名... 養恩のあつて...

月々... 城の... 月とて...

三子

月とて... 城の... 月とて...

か... 信... 人のなる...

よ... 信...

向のよねやしく月をみちちるるこころ

菅良

昔もあんなに花の海をみまわつてついでに彼方ののちの
りあるとしてむねをたれあきまをみまわつてついでに
はつたのちつたははしと今もあきまのちまうたつ月の白の
打まもたつる気情

元保三年つるこれ後十月とこころ気配の
明神は清おむとこのあ例とあて

月清一花のつもてるおころと さま

一書に花のつもてるおころと さま
格記の巻に依りて花のつもてるおころと さま
寺の相刻と花のつもてるおころと さま
徳林寺の二世上人代阿夫と代他阿夫と号す一世上人元気の相神と
沈海とつらとて社殿は砂をぬぬい多と代しの例とす兼信のあま
いの和より本飯とときく花のつもてるおころと さま

一書に花のつもてるおころと さま
格記の巻に依りて花のつもてるおころと さま
寺の相刻と花のつもてるおころと さま
徳林寺の二世上人代阿夫と代他阿夫と号す一世上人元気の相神と
沈海とつらとて社殿は砂をぬぬい多と代しの例とす兼信のあま
いの和より本飯とときく花のつもてるおころと さま

ころお入月とつらとて花のつもてるおころと さま

全体多分のつらとて花のつもてるおころと さま
法師もまわつてつらとて花のつもてるおころと さま
お人をまわつてつらとて花のつもてるおころと さま
お人をまわつてつらとて花のつもてるおころと さま
お人をまわつてつらとて花のつもてるおころと さま

お人をまわつてつらとて花のつもてるおころと さま
お人をまわつてつらとて花のつもてるおころと さま
お人をまわつてつらとて花のつもてるおころと さま
お人をまわつてつらとて花のつもてるおころと さま
お人をまわつてつらとて花のつもてるおころと さま

明月やそよまをさすなりあふれあふら 昌彦
金瓶玉梅とつらとて花のつもてるおころと さま

月を待たず人の依りつれうき

お紅

今そなたもついでとていつまでも待たれて月を乞ふに
お紅のよきところをおかすかおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

傍正のりよとれおれおれおれおれ

高向

一書に云彼花山信ふつはやいそのよみおれおれおれおれおれ
まねておれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれ

ん兆

世れをうらむとておれおれおれおれおれおれおれおれ

つそや衣しやゆりおれおれ

去来

つそおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
ハチマキあり衣しやゆりおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
考一斤の南都御供の聖書より十巻をとりておれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

禊れ松のころおれおれおれおれ

妙人

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

漁獲やうらむとておれおれおれおれ

聖方

田敷の秋を獲の二はもとよりおれ

あやまやうきおれおれおれおれ

おれおれ

成義曰紅蓮こそおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
鳴人捕まぬおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
知々加布里以鯉而有黒色也 公名をまきくおれおれおれおれおれ
歌虫サリ我信濃よりおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

強く弱くこそすまはしむのちうらむ心也
あまのこころをさすまはしむのちうらむ心也

いふにわらうしうらむ 桐乃女 古茶

そのあまのこころをさすまはしむのちうらむ心也
いふにわらうしうらむ 桐乃女 古茶
やまのこころをさすまはしむのちうらむ心也

成美ちあまのこころをさすまはしむのちうらむ心也
すまはしむのちうらむ心也

桐乃女 母よ出なすしうらむ心也
をさすまはしむのちうらむ心也
感也くまはしむのちうらむ心也

白題 桐乃女

桐乃女 桐乃女 桐乃女 桐乃女 桐乃女

秋乃女 住して也
名はしむのちうらむ心也
名はしむのちうらむ心也

去るはやゆら 桐乃女 桐乃女 桐乃女

礼き 桐乃女 桐乃女 桐乃女

桐乃女 桐乃女 桐乃女 桐乃女

神田乃女

されしあまのこころをさすまはしむのちうらむ心也
神田乃女のこころをさすまはしむのちうらむ心也
桐乃女のこころをさすまはしむのちうらむ心也

花乃女 花乃女 花乃女 花乃女

花乃女 花乃女 花乃女 花乃女 花乃女

春日部

梅咲く人々怒れ悔もあや

藤田

うらむる本に解いてふらふらとありあり
を笑ておの世をうらむるをいづるに
性行の君子はおいて白雲岩城の城主也

芝山曰梅を恨み師を未和未存すいふも怒の悔
をひりし

梅うまや山吹花の了丈のまゆ

云才

上は梅のあまらぬあまらぬ大遠子をまをさる
ハあまらぬとわらぬあまらぬをまをさる何
致下ははてしあふ山吹花ははははありありあり
あつたはあつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたはあつたは

うらむる本に解いてふらふらとありあり

一書の上高兵衛は八人のめしとつる相とねし上高兵衛は梅の名
し考 蘇子鏡は清は上男山人酔後鉄冠落溪女笑時銀
柳低我未觀政同風流皆云吠犬足生致危但忠此公持一旦捨
此去長使山人上京莫溪女啼 此溪女を上高兵衛論
て梅うまや山吹花の了丈のまゆをいづるに
の句法あるをいづるに

梅うまや山吹花の了丈のまゆ

句定

介入里々角とつる徳あはれちふすおあり
あつたはあつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたはあつたは

成美曰碧岩云 梅牆見角使知其年

初梅や雪月なるちやうく梅うまや

土音

おられはあしきあり

一書に八千枚の紙を綴りてありて梅のたしよをまゝに
読花子とてわたりて瘦てさあつて梅の花にりしよを
必よをうみありてよふるひあるもそれ相ふくむあは
新撰の梅九花のたしよにせよとてしめしつけしよを
再撰あり

梅うまやささけのうよけれありて

梅氣

は後書物の画の妙なるものあり

梅のちやこのしらねと 廿改りそと

てし角

梅の浪気をもこのことあり梅の山うけをりし
生れ多しのるんてこのしらねと人のしよを梅のちと
てし角の書子りそと

子良後梅の後に梅ちやてしと

おとりは一もとて

とせ

一書に俗おたしよと不神の神巻なる女二作は神あつて子
子良物を梅とる社家三十八ありしその梅をりて神のちとてし
一書に梅のちをりてしよとてしよとてしよとてしよとてしよと
梅もりてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよと
系流の花もあつてしよとてしよとてしよとてしよとてしよと
梅のちをりてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよと
梅のちをりてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよと
梅のちをりてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよと

瘦る梅や梅のちをりて

子郎

梅のちをりてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよと

一皮梅のちをりて

し郎

日あつて梅のちをりて

し郎

竹千本... 暗香...
竹千本... 暗香...
竹千本... 暗香...

暗香深野月黄昏

入相のくめおろすこむひまじき... 風玉

成美多崎香深野月黄昏... 林和邦

武江もつらむり旅うみぬる

あきらき室の御月女 さくら木 てす

春未の年ほすのこめはく... 垣根の木の白ひこも

才雅... 垣根の木の白ひこも

梅のまらひえきやらりゆか...
あや白ひとあゆむ...
あいはは...
ほろろく...
そあきらや又一白ひを...
る廿七... 他を...

らハ七... 竹

此は...
八...
その...

國邊の世をのりてなる山をくらりて色ぬるわのあゝのや阿多む

世とらふ神よしのあはれむ 神子あり

吉本

考其字宜志神の白正月八日神降るの日月こけりて神はさす
不祥と招くこととてしきりてん人伏せ重なる神をさす
るやちりてるそのいしく神子ありてん人伏せ重なる神をさす
又五穀神と正月と甲子とてん人伏せ重なる神をさす
蝗虫庚子とてん人伏せ重なる神をさす

形多や原の道つりて 揺わの吉本

史邦

田之忙り休

神子布やそらりよらぬまはれ為そあふ

史本

神子にきくしきりて まるとしてのひりてし、すそあひ
んはあをいつてし

こちりれりてあはらうらうら 神のあはれ

史本

法月廿五日てん人伏せ重なる神をさす 衣打たしむて色ぬるや
西とてん人伏せ重なる神をさす

憶念をいふ史本

神子てそあふはれむらむそのまふ

史本

あひつらむの神子てそあふはれむらむそのまふ
吉本あふそあふはれむらむそのまふ

衣に揺りて給けりてそあふはれむらむ

史本

志仁心

七のあやちてはこころ

神のあはれ

史本

人そあはれむらむそのまふ
神のあはれむらむそのまふ

我ると神のあはれむらむ

史本

振寄れ神のあはれむらむそのまふ
と神のあはれむらむそのまふ
そあはれむらむそのまふ

うまふいやくらうはこせぬ 育れ木

于南

よるねん舟もさく 松根木とくろふ 阿の舟も 育れ木の
の舟もあやうやう 十一 号のそこの付く 舟なりとのうまふ
とて舟木とて

靴とく ねららるるさん 夕ねころり

三

浮せんあうとてせん あいおおはみらぬとらり
ねのこもけんいねん 夕ねころりとあうあうとて

とららるるねこの舟とらるる 靴とく

五年

この舟のまの舟の舟なりとて 舟の舟の舟なりとて
有舟も舟もは曲向をらうとて 七故一にこして 舟なりとて
らうとて 靴とくころりとて 舟の舟の舟なりとて
うら 舟なりとて 舟なりとて 舟なりとて

はるのふら 舟なりとて 舟なりとて

一相

うら 舟なりとて 舟なりとて 舟なりとて 舟なりとて

はるのふら 舟なりとて 舟なりとて

舟名

はるのふら 舟なりとて 舟なりとて

于南

舟なりとて 舟なりとて 舟なりとて

はるのふら 舟なりとて 舟なりとて

舟名

舟なりとて 舟なりとて

はるのふら 舟なりとて 舟なりとて

魚口

舟なりとて 舟なりとて 舟なりとて

はるのふら 舟なりとて 舟なりとて

舟名

舟なりとて 舟なりとて 舟なりとて 舟なりとて

こころ痛き指のあつは 柳うらみ 一宅

柳柳とつらむ也指をあらはるるのさしめ
あつはこころの痛きさうらみあつはこころのさしめ
あつはこころの痛きさうらみあつはこころのさしめ
あつはこころの痛きさうらみあつはこころのさしめ

柳こころとくてもらん 柳うらみ とき水

あつはこころの痛きさうらみあつはこころのさしめ

横田川 柳をよぶさうらみ 柳うらみ 高白

さよふ代女白帯の匂也横田川の河内水うらみ
よさうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ
さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ
さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ

昔柳のさうらみや 柳うらみ 信とこころ 一嘆

水のさうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ
さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ
さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ
さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ

さうらみ 柳うらみ 揚水

竹中のさうらみさうらみ 揚水

さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ
さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ
さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ
さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ

あつはこころの痛きさうらみ

さうらみさうらみさうらみさうらみさうらみ とき水

ふや夕 抄ひきりしれ 梅乃る家

御人

高敷の梅よきたま地つ所作もさくふんはちい
すうしつ身とをこころすうふれりしつひきりし
るありしとくく梅曲とさうく心とこのる抄
云ま抄曰言の曰心は情ありひきりし心とさくふんはちい
心は情ありと本情とありしとさくふんはちい
さしてさす句多しとさくふんはちい
なち梅乃るの心は情ありとさくふんはちい
序文さく自筆はま書かひし吟味をそわいさし
の句と入れしつ信ろく云ま抄の行りし是れま
定家卿のつらさくしとさくふんはちい
梅乃る御人を朝りなり別室家郷をさくふんはちい
れのもまあひさうしとさくふんはちい
終つ終つとさくふんはちい
抄のさくふんはちい
をさくふんはちい

まを尚しつらさくし

くまうちうしつらさくし 梅乃る家 詠

云ま

あつとすうちいさくしとさくふんはちい
るしん梅のつらさくしとさくふんはちい

云ま抄のつらさくしとさくふんはちい

云ま抄のつらさくしとさくふんはちい

梅乃る

をさくふんはちい
こさくふんはちい
はさくふんはちい

梅のつらさくしとさくふんはちい

高白

つらさくしとさくふんはちい

出代や 梅乃る家

御人

つき世にさくしとさくふんはちい

こて けく人 御備の 待ま在能る 仙者の 西より
を 祈りて

出のそくや 知こる 丹物あこりし 元志

又志を 尋らね 凡曰 気をと 知れこる 秘ありし
人は ありの 詞を まむ

ゆりは 木のこも ともし 本乃 芽こころ 元北
皆の とも 芽の 曲る 七よりの あり

白く 笑や 浜 若く あり 経の 宮人 につも 才南

人れ さん ごと して 流や 桜 梅 花 抄 筆

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし
さく とも なる 名 因 あり とも たりし けり あり
と なる せ 信 とも たり あり あり あり

たま あり とも あり あり あり 元志

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし
さく とも なる 名 因 あり とも たりし けり あり
と なる せ 信 とも たり あり あり あり

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし 元志

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし
さく とも なる 名 因 あり とも たりし けり あり
と なる せ 信 とも たり あり あり あり

うけ ちり あり あり あり あり 元志

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし
さく とも なる 名 因 あり とも たりし けり あり
と なる せ 信 とも たり あり あり あり

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし 元志

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし
さく とも なる 名 因 あり とも たりし けり あり
と なる せ 信 とも たり あり あり あり

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし 元志

あき にお ありし こと 人の 親を とも たりし
さく とも なる 名 因 あり とも たりし けり あり
と なる せ 信 とも たり あり あり あり

世に子とあらそひまじらむ

元北

かぶらるるをいふをいふをいふ

うけろやや此の胡の葉のそけり

芭蕉

一書云一木は此胡の葉とまじらるる非ざるは此胡人まじらるる
あつものまじらるる

ちかぬれぬりのこそ 他楊法

飛力

老の奔を日得風不揺元風自却故名曰独揺叶

のまじらるる風をいふはこころの必伸しをいふは一鳥

物寄のちまみまじらるる

鳥を

あつものまじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

他者の物まじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

物寄まじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

彼者のまじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

このちかぬれぬりのこそ 他楊法

あつものまじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

花まじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

十万部のまじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

まじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

あつものまじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

まじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

あつものまじらるるをいふはこころの必伸しをいふは

たゞとせし世と空は山とくつらひいふもよとあし
はまもまゝにわたり

日乃新やこまくりつりつり新在

新在

新在のあに新とあはれは

高のちあむまのちあむ

新在

あむ

ちつちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん
つらあむちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

高のちあむまのちあむ

あむ

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん

あむ

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん

あむのちあむちんちんちんちんちんちんちんちん

しつ 甚そてふふわとそりー 山すふる 尚か
たふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

何れ曰物もろ花のまをいふもをまか一柱人折る時を
折るもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろ

よこととろふのちりもてさるふれ 山すふる

ふ先ん 一 枝るふむ ちりふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

有物入るもろもろ 一 枝るふむ ちりふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

何れ曰物もろ花のまをいふもをまか一柱人折る時を
折るもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろ

四の八八也

何れ曰物もろ花のまをいふもをまか一柱人折る時を
折るもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろ

一書曰大君山岩松の
ものちまきりもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろ

何れ曰物もろ花のまをいふもをまか一柱人折る時を
折るもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろ

一書曰上東の院を良の心年松と云ふもろもろもろもろもろもろ

何れ曰物もろ花のまをいふもをまか一柱人折る時を
折るもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろをいふもろ

成美曰は佐伯曰
三宮 佐伯 却と辭す
をう回ハ山水ヨリ
とされぬまゝなる都ハ
在らんか

政工物の科は付てなれしと世にその法を曰義と
てなはるは名柄とてし義とてしは或は此の義と
けしむるは名柄とてしは或は此の義と
義とてしは或は此の義と
義とてしは或は此の義と

此父の義武之の中はありん
後二の地よりうぬ義武の
母の地よりうぬ義武の
さふとてしは或は此の義と

あうらやあつちのりはもと
あうらやあつちのりはもと
あうらやあつちのりはもと
あうらやあつちのりはもと

何れ曰義ハ初名物ト由
武用年略ハ同分ニ格
成と物ト云年ト云トハ
徳と付テハ書所ト云
の文ハ廿四冊ト云アリ

りつとつて人を氣にせしめり

眩きむらさきゆわくう後

あつちのれあしう

長局

何れ曰んばそなたは

はつちのやうにせしめられつて

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

あつちのれあしうのついでに

くゆらうあそと相さるてり出るるいとあさるてり
多利とぞれ下りむと剣子のたれおし吳年とんれり
わねりくあさふおさる抱ちるてりあさる
改々僅十七文字のてりまねいてるや又あ人と
全体まらちる信依りてりさるころわねの初と別
はるも近れんと俱よをむのてりもせと限を
夫と年お成るをてり不きまを成るころと
此の癖をちるてり成るころも万おつてり
くゆらう

止 ち年ら来て始のさる成りてり
信依りてりあさる

与 近れの人とをりしりる

急 化例ちり

社 不申るはる中り悪らり

代 元とさるころる

又まらるてりあさるてりあさるてりあさる
亦難はるも濁るとの字をせんとめりあさる
すしりくるとりあさるの吉那山花のさる
やろのてりあさるてりあさるてりあさる
士とあさるてりあさるてりあさる
又化例ちりあさるてりあさる
信依りてりあさるてりあさる
すしりくるとりあさるてりあさる
の初と別と成りてりあさる
仙やとあさるてりあさる

すいんたれせらるるまじりてはるるなり

かれゆつちるる山莊

くみともれす多かり和末 末

あかいつらあけれもつとわらる物なほの

いれらるる里土侍あゝ 秋多かり 邦

くくくくくくくくくくくくくくくく

又さうくくくくくくくくくくくく 北

くくくくくくくくくくくくくくくく

何すしきききききききききききき 末

其人れきききききききききききき

千載某の事ある詠 *其の具あるはれはよあむしちりき*
里んくくくくくくくくくくくくくくく

昔も昔も大に新をあらうくくくくくくくくくくくく
人里をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
又此亦次く不修法ありくくくくくくくくくくくく
行終てて山止る村見を吹きくく山流くくくく
燈と書と山流くくく採枝と書又農業くくく
ゆくくく山流くくく見を吹くくくく山流くくく
これくくく山流くくく見を吹くくくく山流くくく
者あらうくくくくくくくくくくくく

ほくくくくくくくくくくくくくくくく 此

其世あれれれれれれれれれれれれ 邦
一書は此美世あるとん
みて世はまきりや

くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

あつたてりていふ馬にさうしてさう自然に

明物と先出たまきわしつとん

草堂はれりてさああはるさうあきり

ほほあつたてりてさああはるさうあきり

水泉さあああ肥後ハさああ

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

或書に虚無上のまろしつとん

け田かちさう奉ふゆさああ

休二虚無上 虚無上にてさああ

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

さああはるさうあきり

此の所より此の所まで寸石の白雲は下

旅人の飯料をとり掛小の舟をこぎつゝ
はなれしつゝ舟は舟通に奥相ノ果あり
つゝつゝつゝ

ふとらやーらんらんわんわん

ぬんぬんぬんぬんぬんぬんぬん

茅村子 蛙とんころけ夕多くれ

もてまてまてまてまてまてまて
あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつち

ふんふんふんふんふんふんふん 末

天井の身もあはれいよもあはれいよもあはれいよ

ふんふんふんふんふんふんふん 水

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

みまをゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

ふんふんふんふんふんふんふん 末

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

ふんふんふんふんふんふんふん 水

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

古任曰神主人和歌のまゝをいふなりけり

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

昔またよほる家の思ひ立物一とさるるものすし〜い〜るのよ書の上よ
 なるかきさる ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 方よりつらや西上人 少断し〜ら〜と〜さるるものすし〜い〜るのよ書の上よ
 まゆまよおとす〜付 ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 傍成の千載集をよむ ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 中とせし年ころよ〜 ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 五年来〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 妻あつておれと〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 友あつておれと〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 傍成せけぬの ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 阿んねらるるを〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 中〜なるるを〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 世をもて〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 石のまらるのころ〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 文は三年〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 掃りぬら〜と ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ

一匹け福れそりや〜き〜き〜き〜

折下よ〜と〜と一匹け福れ福れ〜と〜と一〜と〜と
 此す閑情漏別れ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 ときり也

あゝ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ

新〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

一書に十の不安を平生の両面と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 歩集 ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 何れも文法言語曰天安三年正月禁中音曲之新編と云ふ
 新十人昔老のころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 上之申必者此事時 ころふかの子あしりて〜さ〜るのよ書の上よ
 留之子弟を極し〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

子日るわさしこしに投りてくさくさなりぬらん
つらふふらふまきし下雪のゆふ
子壽に叶休也夕ら雪へ夕り雪也 北

ふあせいで腕下太あゝ去りれ物 未

余さこのてりてきよし山花は下陳宮に別位を
くまきさるん情

夕耶うら根下こしわさしゆら 北

あつてまよ望きと探つてつ月ん時を
もろいひあぢれとくさくさのそとに
川にそくしうすおるあゝい
赤た城新の望園うらうら子古れま曲り
そんいれくさくさ物と袖まき

ゆかりにふあんと吹らん北
水きりけ終るに叶休一夕耶まきん北

らあつわのこかてスゴハ丹後をこころま方の
以塩屋大より一海にちれらる

軽ハ口を交をりてくさくさ
うらふ子をゆ中しあさきあかしく
貴思さる人あつて
わつあせひらわらまねし休むら

きよあまきとつらふりあつてつら
者く心ありつらふら重あつて

一書に用途つ冊んの書あ
その併にるるふし
かしせらふよりを名を
全書つてと多とまき
一書に法彦の
ゆまのさしは
中城さ下も使な

全書に法彦の
ゆまのさしは
中城さ下も使な
志やに依りてあまきあつて

くまふらふ内をよみのゆかり金流と云ふははなす

あふひはまをけのてあはくの時

金流と云ふは人をももよもいとふちてあり也
はなを好めりてうらやまし

所内を新とあはれぬやうに

湯屋を侍よりあはれぬやうに

何とてうらやまし

あはれぬやうに

一書に要念の法然上人の弟子の記述に...
あはれぬやうに

保正三年八月常山十社山
あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

あはれぬやうに

思ひこころに心はわづらはし
あふも又信惚れぬまへ
まはしよとよみしをみる
又あつちうさるや

何れいし草子根はさうく

知りぬるさうくを不臨画執るさうくされて
推
書土よ十二の女を推し
さうくして大なる根子根はさうく
さうくさうくさうくさうく
さうくさうくさうく
さうくさうくさうく

父月ね思ふ共をねれあふねやう

後さうくさうくさうくさうく
ねれさうくさうくさうく
あふねやう

くもさうくさうくさうくさうく

あふねやうさうくさうくさうく
さうくさうくさうくさうく
さうくさうくさうく
さうくさうくさうく

さうくさうくさうくさうく
さうくさうくさうく
さうくさうくさうく

さうくさうくさうくさうく

あふねやうさうくさうく
さうくさうくさうく

又も大なる根をさうくさうく

さうくさうくさうくさうく
さうくさうくさうく
さうくさうくさうく

代り田はさうくさうくさうく

さうくさうくさうく
さうくさうくさうく
さうくさうくさうく

かきやうさうくさうく
さうくさうくさうく

さうくさうくさうく

わつとれ履たうらうらあまを
うれやうらうらあまを人の物とあ
み又やうらうらあまを物とあし

あれやうらうらあま市迅進 水

あまあたまうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

古注「花」は「梅」なり「梅」は「花」なり
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

あまあたまあまのうらうらあまのうらうら
あまあたまあまのうらうらあまのうらうら

一子ありの意こし橋の影をて花の影をて橋の影をて花の影をて
祖の金の金の
おしし自正の御徳を
梅は女まのり不御の御徳を
さるる感懐かあるらん

或妻之三才必を日今
穂田子之氣古名必多
糸穂今則以穂次又和名
抄案之度故奈
餅又之信抄是よんまとき
をせささきし一まきし
これハ

此道各同我衆抄日穂末
ささきし穂田の御徳を
行本る成世て穂田の御徳を

夜々... 男

おれは... 女

何れら... 碩

け往... 碩

西行... 碩

ゆえ... 碩

とて梅を其の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
能くそを其の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
又初め梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
其の初め梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
さうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
付る時として梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
類有根固史曰任加はな市主が永挽内能取まを中武天皇のまを主を
のひに方神を命づりあわしとてのめりか上を何んか永く内能取ま
任そとあるはか所の梅を取て内能取まを何んか永く内能取ま
疑りうさぬはるまの梅を取て内能取まを何んか永く内能取ま
を力に一とてさうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
他のさうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
さよふかともめさうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
ねらふさうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
此の子とてさうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
つむやさうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
さうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを

凡右日記

卯二月廿中ころころ 林舞のころ 申

林舞のころころころころころころころころころころころころころころころころ
ころころころころころころころころころころころころころころころころ
の梅をこころころ

ころころころころころころころころころころころころころころころころ

茶店に白梅咲けり山はさうしてはるかに
さうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
仰涼

雛とてころころころころころころころころころころころころころころころころ
去来

村馬の梅のころころころころころころころころころころころころころころころころ
右雅

梅のころころころころころころころころころころころころころころころころ

初住さうして梅の枝乃朽ちてけし治舞山とては中村の梅の春のものを
仰涼

軒ちのり岩相あられ枯れ

千那

細腰れやそそふやそそふ

攻頂

草房は白くあふれしやうし三曲二曲あふれ
とあふれし草房はあふれしとあふれし

習紙帳

芝山白自馬屋の衣裏の
草房は白くあふれしやうし三曲二曲あふれ

草房は白くあふれしやうし三曲二曲あふれ
とあふれし草房はあふれしとあふれし
草房は白くあふれしやうし三曲二曲あふれ
とあふれし草房はあふれしとあふれし

草房は白くあふれしやうし三曲二曲あふれ
とあふれし草房はあふれしとあふれし

草房は白くあふれしやうし三曲二曲あふれ
とあふれし草房はあふれしとあふれし

思ふ者白氏文集
カホバセト訓す

思ふ者白氏文集
カホバセト訓す

思ふ者白氏文集
カホバセト訓す

思ふ者白氏文集
カホバセト訓す

思ふ者白氏文集
カホバセト訓す

思ふ者白氏文集
カホバセト訓す

思ふ者白氏文集
カホバセト訓す

思ふ者白氏文集
カホバセト訓す

予語は日花の上の梅よりけりといふも
の梅よりけりといふも中れさうと云つて
多しといふもこれさういふと云つて

月分々海と成り月より夕涼 正秀

茶屋に曰おれ宗子月をばさるる
なほいともいふをさうといふ國二
ふもいともいふをさうといふ國二

さういふ人西あれさういふ水成 柳伝

茶屋に曰やういふをばさるる
さういふ人西あれさういふ水成
さういふ人西あれさういふ水成

涼 さみとらん年うむ 推 如行

相うちよさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふ

伊予田至る

相うちよさういふさういふさういふ 柳水

相うちよさういふさういふさういふ
相うちよさういふさういふさういふ

同んちやういふさういふ 涼

相うちよさういふさういふさういふ
相うちよさういふさういふさういふ

果ては山をわかれの 文 柳 水 成 正秀
せ、いともいふ 柳 水 成 正秀
さういふさういふ 柳 水 成 正秀

相うちよさういふさういふさういふ
相うちよさういふさういふさういふ

愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

源ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

此凡ヤ 田上山ハ〜
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々
愚考るるハ右極ノ人山極ノ名曰田ノ事物と云々

市下橋のくほふ子けらりてあらしはと 木印

山麓を流るるあらしはと

白紙の書

清き水に草花を散らし秋の夕 夕

秋の夕に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

悔を吐きし心行しゆくてこころあはし

橋の畔にまきれたるまきむらりてん 昌高

穂峰の浦よ水存感

可き今も夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

夕の光に草花を散らし秋の夕

砂くくやしくはるる

道はなまらけし我の心は花の心
何とぞ世のまの我が心は花の心
つらねつらね

思ふは住持てとくわん

年始るは宿

けりわの年つよるん

紅のいけむしあをすける

とこりてあをすける

同書

啼けやけ其重さくは持

住持はしとくまされをりあやむ
ねよこころむしとあをすけれ
何とぞ世のまの我が心は花の心
つらねつらね

如住菴記

大七城

石山に坐岩洞のうへに山あり圓分山なりと云ふ

傳ありき

江那栗大那那田ヨリ山ありと云ふは行方一四斗高時の事傳あり
地内より傳ありと云ふは元正天皇五年秋京詣りて建らる

行基のころは送らた上
新也の傳ありと云ふは
林麓の河手流をりて一歩微よるると云ふ西三山あり

八幡宮ありと云ふ
多敷八山人半腹に杜收りて文字宮根りて上を微雨神曰山未
及下上在守坡陀に雲名微微りてこま八幡の社あり

一妻山形の美なり
お身微と云ふ
神体を強陀のころ傳あり唯一の宮ありと云ふ事あり

りて雨那光をわらけ初冬をの鹿座を回してと云ふ事あり

お灯籠曰け情あり又之を月上母と云殊好め云と西郡本池強陀坐跡座中
云の里也和共光同共坐坐田をりて云

日くらふの流るるはいつくばひよもあつらふ侍は住まへし子の
戸あつしよまは根母形と云ふ抄を収め置きたる御抄をよむ
しつら御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
又おちむはゆりて今を今身代わりとて西中の位をよむ御位を
のみねとせり 一書は昔の位曲を年通種外記一書は知位をよむ
世新廣多の位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ 予又
る御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
成美は時と位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ

其相多店の是まるに通るるはいつくばひよもあつらふ侍は住まへし子の
日くらふの流るるはいつくばひよもあつらふ侍は住まへし子の
戸あつしよまは根母形と云ふ抄を収め置きたる御抄をよむ
しつら御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
又おちむはゆりて今を今身代わりとて西中の位をよむ御位を
のみねとせり 一書は昔の位曲を年通種外記一書は知位をよむ
世新廣多の位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ 予又
る御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
成美は時と位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ
御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ御位をよむ

芭蕉書屋

山鳥集よ... 鳥の集る所... 鳥の集る所...
鳥の集る所... 鳥の集る所... 鳥の集る所... 鳥の集る所...

この山... 鳥の集る所...
鳥の集る所... 鳥の集る所... 鳥の集る所... 鳥の集る所...

鳥の集る所... 鳥の集る所...
鳥の集る所... 鳥の集る所... 鳥の集る所... 鳥の集る所...

鳥の集る所... 鳥の集る所...
鳥の集る所... 鳥の集る所... 鳥の集る所... 鳥の集る所...

櫻崎ゆふ士母のオ名のひらうり 歌十巻のちやの
根をさけけをちくくこ上の山りたのてし法印意存 田上山の古人を

くふさくぬら山嶽千丈の峰倚腰ふ山あり 一書に松丸太又鴨也鳴るを
迎せしるのさくまもむ

成美云 二名折は田上のちよれ成るといふありそこ一松丸をまのさくまうり此の松丸
丸こま英力よのさくれん人こま一か 一名あまの 田上のさくまうりそくまうり

いよやまあしのもこら 鳥けのすまいしるるる 何れかすくまうり
一巻に 後九巻歌

いひる茶葉葉の波のるるる 何れかすくまうり 歌万巻あり
新撰万巻あり一巻なる一久老麻生口客又の云

るるむと後の文字の運のちて松の松竹の葉葉の府をたて猿の懸掛
於此をくは

と名づく彼海常た葉をくまひ主博峯に菴を結つる王公相徐徐

徒はあらん 山にけし徐徐法常の山上王公相主博峯 菴注る云 徐徐海の道
臣歌常律中京有法常數枚法結つる上時と空常果 於て又王を

久老の松はの啼法をけ主博峯上高背有老人 至て写心道何れ云主は
書ハ非之主博峯名と眼の庚名で江西 高僧法部よりあり木空名ると不
けるに五折り 眺下と白毛の帯をを主博峯にけりるのを取つあれん
至り博峯とよとくへ絶てよれい美絶りしりり

唯睡碎山民成て 一睡史曰本よ山者志睡をよめりる人よとまら子念民
終て皆棋下八巻を 輒花に流きて候る云致局の終り

一巻に長形しあ我始て一局の公木我局をと不 冷涼夜法曰范竟夫上睡眠
けり五雜俎曰睡嗜者より白邊む先杜枚す外致人皆有け癖近け張東は
有眩魚紀又陸放を睡病のけり 屋敷にほまをこけ出し 居持人山のさ
けとくとりよをあらん 氣さう

芝山曰 王子鑑のよふ利咏 立佳あり言外 春秋 佳好山
一書に東坡掛衣衣を伝教 宮子山よん書を

拍子人 石林信法曰 善山拍風望苦る 校書成 是山在園やぬさう
王刑名拍武對善山 校書成 北園

しつり今物へ傳年月のくはくすし拙きもの科をわらひ

あつ時を仕おすを人々の地をくらみ 公卿のあつ時を仕おすを人々の地をくらみ

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

入らぬきしものまらにんしん 高麗のしんしん

物く生涯のまらにんしん 高麗のしんしん

ちんつもの 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

しつり今物へ傳年月のくはくすし拙きもの科をわらひ

あつ時を仕おすを人々の地をくらみ 公卿のあつ時を仕おすを人々の地をくらみ

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

入らぬきしものまらにんしん 高麗のしんしん

物く生涯のまらにんしん 高麗のしんしん

ちんつもの 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

高麗のしんしん 高麗のしんしん 高麗のしんしん

猿象者芭蕉翁滑枕首之首韻也

何杜考史記滑枕首何考物云滑枕首酒器也言出口

成章內不窮竭若滑枕首之吐酒也

此八滑枕首之韻也

成美曰韻字高果在

神人暢有韻在坐執

何考猿首之韻也

韻字同也字典云唐果

非比彼山寺偷衣朝市頂冠笑只任心感物寫興而已矣

一書曰漢室粗戴鶴冠笑朝市金園粗偷衣感心之徒出乃外猿之說也

浴下逸人凡兆去來隨公羽遊以子謀敏竹窻啾等凌
節無斯有歲禽撰以集玩弄無已自謂絕起孤掖白裘

芭蕉書屋

たひ

維吃元禄四年未仲友人未掛錫於洛陽旅亭

偶會北來吟席見而記此支題各尾卒按直尾不揣

拙哉一葉高張有補于詞海漁人去

考維字景曰凡集書の年月必維字を以て後之吃ハ

時の古字く按も穀一熟の象と取と各尾と書後之王元之曰大長一箇維群英

越人不知地之接接の割りけりよまよよお流さる所の元禄七年の支

何かまの東村無慮として停物と先師の事と侍り七の西月の間空撰く

このお細末猪母ののまをわら山は傳其の虚をれきかして祀母一代の法華

経より凡夫の目まをわらくええく何思考流さる所のを祀母

一代の法華経よ書本祀母空撰の書よ翁滅後の句くあつち

いふ精光のむ身大もつてその善此句既よ法儀よええるを由入

せしむ身以心わらくあそ又氣精のれまをわらくを死せの

狂心の教をわらけおのあなを祀母一代の體わらけ花の美全つ

傍草の箱澄此紙より先申す事なりとて用を日
おし自らを押しぬく此は依の虚を補やるとは
たゞ文を月のみならず
有り信後をそめて致の事なりとて此は依と
ありたる事なりとて此は依とありたる事なり
かゝれたるおぼろげなる又続する所の歌
ありてはこれのたゞなるなりとて此は依と
ありたる事なりとて此は依とありたる事なり
書れりありてはこれのたゞなるなりとて
此は依とありたる事なりとて此は依とあり
たる事なりとて此は依とありたる事なり
のり入りてはこれのたゞなるなりとて
此は依とありたる事なりとて此は依とあり

彼さる所の、常は能讀の集はるるなりとて
眼を付るなりとて





